

OpenAI の牙城に挑む日本の AI リサーチ市場： 「第二の波」の深層分析



Genspark

Jul 07, 2025

情報

ブックマーク

共有

インスピレーションと洞察から生成されました [15 ソースから](#)

これで十分な情報が収集できました。次に、収集した情報を包括的にまとめて、日本語で詳細なレポートを作成します。

はじめに

OpenAI の ChatGPT が世界を席卷する中、AI リサーチツール市場では新たな「第二の波」が押し寄せています。Yahoo!ニュース [1](#) の記事が示すように、この波は単なる技術進歩ではなく、消費者向けから企業向けへのパラダイムシフトを象徴しています。日本においても、この潮流は国内の AI 企業や大手企業の戦略に大きな影響を与えており、独自のエコシステムが形成されつつあります。

本稿では、日本国内の AI リサーチ市場の動向を深掘りし、注目企業の事例分析から「第二の波」の実態を明らかにしていきます。

第一章：「第二の波」とは何か

1.1 定義と特徴

元記事で示された「第二の波」とは、AI リサーチツール市場が**消費者向けツールの発展から企業向け機能拡充の動きへと転換**している現象を指します。この変化は、以下のような特徴を持っています：

1. **B2C から B2B へのシフト**：個人利用からエンタープライズ用途への展開
2. **機能の高度化**：単純な検索から深層分析・レポート生成まで
3. **市場競争の激化**：「AI ブラウザ戦争」と呼ばれる激しい競争環境
4. **利用者の急拡大**：米国では 2024 年後半に全労働者の 28%が生成 AI を業務活用 [1](#)

1.2 グローバル市場の動向

主要プレイヤーの動きを見ると、この「第二の波」の勢いが鮮明に現れています：

- **OpenAI:** 2025 年 2 月に ChatGPT Pro ユーザー向け「Deep Research」機能を発表、月額 200 ドルで 250 クエリを提供
- **Google:** Gemini Advanced で Deep Research 機能を 2024 年末に先行リリース、2025 年に Gemini2.5 Pro モデルで大幅性能改善を実現
- **Perplexity AI:** 月間 4 億件のクエリを処理し、2025 年の収益は 1 億ドル（前年比 5 倍）に達する見込み
- **AlphaSense:** 年間経常収益が 2025 年初頭に 4 億ドル超に到達（2024 年 4 月の 2 倍以上）

第二章：日本の AI リサーチ市場規模と成長予測

2.1 市場規模の爆発的成長

日本の AI 市場は驚異的な成長を遂げています。IDC Japan² の最新調査によると：

- **2024 年の国内 AI システム市場:** 前年比 56.5% 増の 1 兆 3,412 億円
- **2024～2029 年の年間平均成長率 (CAGR) :** 25.6%
- **2029 年の市場規模予測:** 4 兆 1,873 億円（2024 年比 3.1 倍）

生成 AI 市場に特化すると、さらに急激な成長が見込まれています。HP TechDevice³ の分析では：

- **2024 年:** 1,016 億円（初の 1,000 億円突破）
- **2023～2028 年 CAGR:** 84.4%
- **2028 年予測:** 8,028 億円
- **2030 年予測:** 2,110 億ドル（JEITA 予測）

2.2 成長を牽引する要因

この爆発的成長の背景には、複数の要因が重なっています：

1. **ビジネス需要の増大:** 業務効率化と生産性向上を求める企業からの強い需要
2. **ベンダーによる技術統合:** アプリケーションソフトウェアやプラットフォームへの生成 AI 機能組み込み
3. **応用分野の拡大:** データ分析、リスク管理、顧客サービス、ソフトウェア開発など多様な分野での実装
4. **投資の活発化:** ベンチャーキャピタル、大手企業、政府による積極的な研究開発・インフラ投資

2.3 市場を牽引する技術分野

IDC Japan²の分析によると、以下の分野が市場成長を牽引しています：

1. **生産性ユースケース**: コンテンツ作成支援、ドキュメント要約、プログラミング支援
2. **ビジネス機能ユースケース**: マーケティング、人事、財務、IT 業務の最適化・自動化
3. **予測系・認識系 AI**: 従来からの AI 技術も引き続き安定成長
4. **AI エージェント技術**: AI アシスタントから AI エージェントへの進化、マルチ AI エージェントシステム（エージェンティック AI）への発展

第三章：日本発 AI スタートアップの躍進

3.1 Felo：日本発 AI 検索エンジンの挑戦

日本の AI リサーチ市場で最も注目を集めているのが、Sparticle 社が開発した Felo⁴です。この日本発 AI 検索エンジンは、グローバル競合を上回る性能で急成長を遂げています。

3.1.1 Felo の革新的機能

Felo は単なる検索エンジンを超えた多機能プラットフォームとして設計されています：

- **多言語対応**: 日本語入力のみで世界中の情報を参照した最適回答を提供
- **SNS ソース活用**: X や Reddit など SNS からリアルタイムのトレンド情報を抽出
- **全ネットワーク検索**: 複数の検索プラットフォームを横断し、他では見つからない情報を提供
- **高度な AI 技術**: OpenAI O1、Claude 3.5-Sonnet など最新 LLM を活用
- **多機能生成**: マインドマップ、パワーポイントスライド、画像生成を一クリックで実現
- **エージェント機能**: 2025 年 1 月に追加された検索エージェントによる自動リサーチ～資料作成

3.1.2 市場での位置づけと成果

Felo の市場での躍進は目覚ましく：

- **ユーザー獲得**: リリース 1 か月で 15 万人以上を獲得
- **競合比較**: 従来代表的だった Perplexity、Genspark と比較して「性能が上回る」と評価
- **日本語特化**: 主要メンバーが日本人、国内発の開発チームによる日本語最適化で差別化

- **資金調達:** 開発会社 Sparticle 社は 2023 年 10 月にプレシリーズ A ラウンドで約 5 億円を調達 [4](#)

3.2 Preferred Networks：日本 AI 界の雄

Preferred Networks (PFN) [5](#) は、2014 年設立以来、日本の AI スタートアップエコシステムを牽引してきました。

3.2.1 事業展開と技術力

PFN の事業展開は多岐にわたります：

- **深層学習フレームワーク:** 「Chainer」を 2015 年 6 月にオープンソースで公開、2018 年 10 月にバージョン 5 をリリース
- **自動運転技術:** トヨタ自動車との共同研究により実用化を推進
- **産業用 AI:** ファナック、日立製作所との共同研究でロボット・工作機械向け技術を開発
- **医療 AI:** 国立がんセンターなどとの共同研究で血液によるがんの早期診断技術を開発

3.2.2 投資と企業価値

PFN は日本最大の AI ユニコーン企業として、以下の投資を受けています：

- **トヨタ自動車:** 累計約 115 億円の投資
- **その他出資者:** ファナック、日立製作所、三井物産、博報堂 DY ホールディングス、みずほ銀行

3.3 その他の注目 AI ベンチャー

SEMI Japan [5](#) の調査によると、以下の企業も注目に値します：

1. **ABEJA:** AI プラットフォーム「ABEJA Platform」を 100 社超に導入、520 店舗以上で「ABEJA Insight」を提供
2. **BrainPad:** 東京証券取引所第一部上場のデータ分析サービス企業
3. **LeapMind:** 低消費電力 FPGA を活用した組み込み型ディープラーニング支援
4. **Hacarus:** 少量データで動作するスパース・モデリング AI「HACARUS-X」を開発
5. **LPixel:** 医療・ライフサイエンス向けの画像診断支援技術を提供

第四章：大手企業の AI 導入事例と成果

4.1 製造業の先進事例

4.1.1 パナソニック コネクト

パナソニック コネクト [6](#) は、AI アシスタント導入において日本企業の中でも特に際立った成果を上げています：

- **利用実績:** 1 日あたり約 5,000 回という高頻度の利用を実現
- **生産性向上:** 現場業務の一部を自動化し、コア業務により多くの時間を割当可能に
- **モーター設計 AI:** 電気シェーバーのモーター設計に生成 AI を活用し、試作・検討の手間を大幅削減、開発期間を短縮

4.1.2 三菱重工業

三菱重工業 [7](#) は、Azure OpenAI Service を活用した「TOMONI TALK with ChatGPT」を展開：

- **デジタルイノベーション:** 2021 年に「Σ SynX (シグマシンクス)」ブランドを創設
- **発電プラント向けソリューション:** 遠隔監視、制御の高度化、スマート保全の 3 機能を提供
- **将来構想:** 蓄積データを用いた「TOMONI Copilot」の開発を計画

4.2 小売・流通業の革新

4.2.1 セブンイレブン

セブンイレブン [6](#) は商品企画プロセスの革命的効率化を実現：

- **プロセス改革:** 商品企画工程を約 90%短縮
- **AI ライブラリー:** 2025 年 6 月に社内知識を統合した生成 AI 基盤「AI ライブラリー」をローンチ
- **音声対応:** 店長が話しかけるだけで発注・販促ノウハウを提示するシステムを構築

4.3 金融業界の先進取り組み

4.3.1 三菱 UFJ 銀行

三菱 UFJ 銀行 [6](#) は大規模な業務効率化を達成：

- **労働時間削減:** 生成 AI 導入により月 22 万時間の労働時間を削減
- **コールセンター:** 顧客対応業務の自動化・効率化を推進
- **提案業務:** 企業向けや富裕層向けの提案業務において効率化を実現

4.3.2 第一三共

第一三共 [7](#) は製薬業界特有のセキュリティ要件に対応：

- **DX フレームワーク:** 「ABCDX」により日常業務 (AX)・プロセス (BX)・文化 (CX) の変革を推進
- **DS-GAI プラットフォーム:** 社内向け生成 AI プラットフォームを開発・全社展開
- **利用実績:** 600 人以上が毎日利用し、8 割以上が「業務の生産性と精度が向上した」と回答
- **セキュリティ:** Azure OpenAI Service のコンテンツフィルタリングシステムとセキュアな API 認証を活用

4.4 エネルギー業界の取り組み

4.4.1 JERA

JERA⁷は「JERA ゼロエミッション 2050」達成に向けた AI 活用を推進：

- **EKA システム:** デジタルツイン×メタバース×生成 AI の「エンタープライズナレッジアドバイザー」を開発
- **多言語対応:** 過去トラブル解消法の自動検索・自動翻訳機能を提供
- **グローバル展開:** 世界各地の発電所データを即座に活用可能な体制を構築

第五章：グローバル企業の日本市場戦略

5.1 Google Gemini Deep Research の日本展開

Google Gemini Deep Research⁸が 2025 年 1 月に日本語対応を開始し、日本企業での活用が本格化しています：

5.1.1 機能と特徴

- **複雑なリサーチタスク:** タスクを細分化し、ウェブを探索して包括的なレポートを生成
- **多言語対応:** 150 カ国、45 以上の言語で利用可能
- **企業活用:** 競合分析、デューデリジェンス、トピック理解、製品比較などに対応
- **Google Docs 連携:** レポートを直接 Google Docs に出力可能

5.1.2 日本市場での活用事例

日本企業での活用が進んでおり、特に以下の分野で成果を上げています：

- **市場調査:** 家事代行のグローバル市場動向と日本企業のプレゼンス分析⁹
- **競合分析:** 小規模ビジネス立ち上げのための競合分析や適切な出店場所の提案
- **業界リサーチ:** 特定分野に絞った情報収集・分析

5.2 Microsoft Azure OpenAI Service の企業展開

Azure OpenAI Service⁷ は、日本企業の AI 導入において重要な役割を果たしています：

5.2.1 セキュリティとコンプライアンス

- **データ保護:** 顧客データはモデルのトレーニングに利用されない
- **企業向けセキュリティ:** Azure のセキュリティ機能（アクセス制御、監査ログ）を適用
- **コンテンツフィルタリング:** 不適切なコンテンツを自動的にフィルタリング

5.2.2 主要導入企業

以下の企業が Azure OpenAI Service を活用した成果を上げています：

- **三菱商事:** テキスト業務の効率化と投資・経営判断支援
- **すかいらーくホールディングス:** 店舗運営業務の最適化
- **日本ハム:** 「生成された顧客」分析により 1,000 人へのアンケート調査を 45 分で実施
- **スズキ:** 企業成長に向けた新たな取り組みの効率化

第六章：AI エージェント時代の到来

6.1 AI エージェント市場の急成長

Gartner¹⁰ の予測によると、2028 年までに日本企業の 60% で AGI ベースの新たなエージェント型 AI とヒューマノイドと共にビジネスを行うことが当たり前となるとしています。

6.1.1 日本企業での導入実態

ZDNet Japan¹¹ の調査によると、AI エージェントを既に導入している企業では以下の用途が多く見られます：

- **データ収集・分析・洞察:** 50.0%
- **社内問い合わせ対応:** 41.4%
- **顧客サポート・接客支援:** 39%

6.1.2 導入効果と働き方の変化

AI Inside¹² の調査では、AI エージェント導入企業の 91.1% が「働き方のポジティブな変化」を実感しており、具体的には：

- **AI との協働スキル:** 52.0% が「AI との協働スキルが求められるようになった」と回答

- **クラウドベース選択:** 導入企業の約 70%がクラウドベースソリューションを選択
- **コスト削減:** オンプレミス導入と比較して 40%のコスト削減を実現

6.2 技術進化の背景

IDC Japan²の分析によると、AI エージェント技術の進化には以下の要因があります：

- **LLM の進化:** 大規模言語モデルの性能向上
- **RAG 技術:** 検索拡張生成による精度向上
- **オーケストレーションツール:** 複数の AI サービスを統合管理
- **AI エージェントビルダー:** データ管理と統合開発環境の整備
- **エージェントイック AI:** マルチ AI エージェントシステムへの発展

第七章：日本特有の課題と機会

7.1 導入格差の拡大

HP TechDevice³の分析では、日本における AI 導入は業界・企業規模ごとに大きな格差が存在します：

7.1.1 課題の構造

- **デジタルデバイド:** 大企業と中小企業間、業界間での導入格差が拡大
- **人材不足:** AI エンジニアやデータサイエンティストの絶対的な不足
- **投資余力:** 中小企業では投資余力が限られ、導入が遅れがち

7.1.2 解決策の方向性

格差解消のためには以下の取り組みが必要です：

- **導入しやすいツールの提供:** SaaS ベースの低コストソリューション
- **補助金・助成金:** 政府による中小企業向け支援策の拡充
- **専門家サポート:** 導入コンサルティングサービスの充実

7.2 日本市場の独自性

7.2.1 技術的特徴

SEMI Japan⁵の分析によると、日本の AI エコシステムには以下の特徴があります：

- **エッジ・組み込み対応:** 低消費電力・小型化環境での実行に強み
- **少量データ対応:** 大量データが必要な海外技術に対し、少量データでの学習技術を開発
- **解釈性重視:** ブラックボックス化を避け、判断プロセスの可視化を重視

- **製造業との連携:** トヨタ、ファナック、日立など製造業大手との共同研究が活発

7.2.2 投資動向

AI Index Report 2024¹³によると、日本の AI 研究開発投資は以下のような特徴を持ちます：

- **政府投資:** 生成 AI 開発能力強化のため 84 億円の予算を投入（2024 年 4 月）
- **民間投資:** 全ベンチャー投資額のうち約 20～25%が AI 分野に集中
- **国際比較:** 米国・中国・イスラエルに次ぐ AI スタートアップ投資規模

第八章：2025 年以降の展望

8.1 市場成長の加速

8.1.1 投資動向の予測

Wellington Management¹⁴の 2025 年ベンチャーキャピタル市場予測では：

- **投資の増加:** 妥当なバリュエーションでの投資機会の拡大
- **AI 分野への集中:** 生成 AI 関連スタートアップへの投資が継続的に増加
- **第二成長フェーズ:** 2025 年以降に AI スタートアップ市場が「第二成長フェーズ」に突入 ¹⁵

8.1.2 技術革新の方向性

今後の技術発展において注目すべき分野：

- **マルチモーダル AI:** テキスト、画像、音声、動画を統合した生成 AI
- **AI エージェント:** 自律的タスク実行能力の向上
- **エッジ AI:** 組み込み環境での AI 処理能力の強化
- **量子 AI:** 量子コンピューティングと AI の融合

8.2 企業戦略の変化

8.2.1 導入アプローチの進化

企業の AI 導入実態調査 ¹¹によると、成功企業は以下のアプローチを採用しています：

- **段階的導入:** 小規模プロジェクトから始めて徐々に拡大
- **トップダウンのリーダーシップ:** 経営陣による強力な推進体制
- **データ品質の重視:** 高品質なデータセットの構築を優先
- **人材育成:** 社内の AI リテラシー向上への投資

8.2.2 競争優位の源泉

今後の競争において重要となる要素：

- **データ活用力**: 自社データを効果的に AI に活用する能力
- **セキュリティ対応**: エンタープライズグレードのセキュリティ確保
- **業務統合**: 既存業務プロセスとのシームレスな統合
- **スケーラビリティ**: 組織全体への展開可能性

まとめ：日本の AI リサーチ市場の未来

OpenAI の牙城に挑む「第二の波」は、日本の AI リサーチ市場において新たな競争環境を生み出しています。Felo を筆頭とする日本発の AI スタートアップ、Preferred Networks のような技術力の高いユニコーン企業、そして三菱重工業、セブンイレブン、三菱 UFJ 銀行といった大手企業の先進的な取り組みが相互に影響し合い、独自のエコシステムを形成しています。

市場規模の観点では、2024 年の 1 兆 3,412 億円から 2029 年の 4 兆 1,873 億円への成長が予測されており、特に生成 AI 分野では 84.4% という驚異的な年間成長率が見込まれています。この成長を牽引するのは、AI エージェント技術の普及、企業向けソリューションの充実、そして日本特有の製造業との連携による実用化の加速です。

しかし、導入格差の拡大、人材不足、投資余力の制約といった課題も顕在化しています。これらの課題を克服するためには、政府による支援策の拡充、教育機関との連携強化、そして業界を超えた協力体制が不可欠です。

2025 年以降、日本の AI リサーチ市場は「第二成長フェーズ」に突入し、グローバル競争において独自の地位を確立することが期待されます。日本語処理に特化した技術、製造業との深い連携、そして高いセキュリティ要件への対応能力は、日本企業の重要な差別化要因となるでしょう。

OpenAI の牙城に挑む日本の「第二の波」は、単なる技術革新を超えて、日本経済全体のデジタル変革を加速させる原動力となりつつあります。この波に乗り遅れることなく、持続的な成長を実現するためには、企業、政府、学術機関が一体となった戦略的な取り組みが求められています。

Appendix: Supplementary Video Resources



【AI で競合分析】リサーチからレポート作成まで全部 AI で可能!?

Jun 23, 2024



【超時短】コンサルタントはもう不要!? 数十万円級のリサーチ ...

Jan 11, 2025



【2024 年度版】ビジネス必見!!ChatGPT で市場調査を圧倒的に ...

Sep 3, 2024

もっと詳しく

1

news.yahoo.co.jp

2

my.idc.com

3

jp.ext.hp.com

4

seleck.cc

5

www.semi.org

6

skillbridge-dev.com

7

weel.co.jp

8

www.suzukikenichi.com

9

note.com

10

www.gartner.co.jp

11

japan.zdnet.com

12

inside.ai

13

ainow.ai

14

www.wellington.com

15

nocoderi.co.jp